

# 橋上の地獄

加藤 茂

中央一丁目

昨日の朝から吹き荒れていた強風は、夜半になってますますその勢いを増して、風速はゆうに二〇メートルを超した台風なみの強さになっていった。そんな強風下に一〇〇機を越すB29の夜間爆撃によって下谷、浅草、向島、押上など下町一帯に発生した猛火の中を、一晚中必死に逃げまわった悪夢の夜が明けて、朝がやって来た。あれほど猛威をふるった大火災も、燃える物は全て焼きつくして、可燃物がなくなり自然鎮火したのか、火焰も黒煙も見えなくなった。

三月といっても、陽が昇るのはまだ遅い。私も父も夢中で逃げまわっているうち時計を壊してしまったので、正確な時間を知ることはできないが、周囲の明るさから思えば、もう朝の八時は過ぎていただろう。

死の恐怖に脅えながら、悪夢の一夜を過ごした墨田公園（墨田区側）には、立錐の余地もない程大勢の避難民が、家を焼かれ全財産を失って、虚脱状態でただぼう然自失し、無言のまま地面に座り込んでいるだけだった。そんな避難民の間を縫うよ

うにして、「たとえ焼けてしまった我が家でも、焼け跡だけでも見たい」と、私は心臓病で弱りきっている父の手をひっぱって、牛島神社の境内を通り言問橋のたもとに出た。

昨夜の火災の状況から予期はしていたものの、路上に出た私の眼前に見えた街の光景は、私の想像を遙かに越した、この世の地獄絵であった。昨日までであった街の建物は何一つなく、目に入るものはただ焼け落ちた灰塵だけだった。隅田川にかかる言問橋の上には、ただ焼け焦げた真っ黒な塊りだけが、足の踏み場もなく散乱して、何とも表現出来ない強い異臭をはなっていた。

「よく何もかも焼けたもんだ。残った物は避難者が運び出した荷物の残骸だけか」橋上の焼けた真っ黒な残骸を見て、一瞬私はそう思ったが、十数歩歩いてその黒い塊りをよく見ると、その焼け焦げた真っ黒な塊りは荷物の残骸ではなく、全て人間の焼死体だった。単なる焼け焦げた棒きれと思った黒い棒状のものは、焼けて真っ黒になって遺体から離れてしまった人間の

腕であり、足であった。最初に私が見た焼死体は、真中に小さな遺体が三つ、それに覆いかぶさり、その小さな三つの遺体を守るようにして、やや大きな遺体が二つ折り重なっていた。きつと、最期まで子供たちを助けようと、両親が自分達の体の下に子供達を入れた悲しい親心が、こんな姿になったのだろう。迫りくる死の苦しさを、人間の最後の力か、苦しみに耐え、そして耐えきれず強制された最期の苦痛であろう。片腕が空しく天に向かって虚空をつかんでいるが、他の片腕は遺体を離れ、棒きれのように路上に転がっていた。

また、その脇にも、その隣にも同様な遺体が足の踏み場のないほどに密集して転がっているが、どの遺体もなぜか単独のものではなく、それぞれが数体、十数体と固まって、その複数体が一つの塊りとなっているから、灰塵ではれ上がった私の目には、それら焼死体の山は、当初それを荷物の残骸と見間違えてしまったのだ。真っ黒く炭化してガサガサと風に鳴っているのが、人間の焼かれた無残な姿なのだった。遺体はどれも、男女の性別など判別出来るものは一つもなく、まして、その年齢など推定出来るものは一体もない。ただ、遺体の大小によって、それが大人か子供かと判別できるだけである。

遺体の顔と思われるあたりの両眼と鼻、そして口の所が虚しく空洞となって穴が空いているのが、人間の頭蓋骨らしいわずかな面影をとどめているが、その頭蓋骨も縦半分に割れて、半

分しか残っていないものもある。どの遺体も大きく口を開き、その空いた口は斜めに引きつり、天に向かって妖火に焼かれる無念さと死の時の苦しみを現している。ある者は両手をひろげて天に伸ばし、ある者は小さく丸まった姿で……。片方の足はどうしたのだろう。片足しかなく、他の足はどこにも見あたらないものもある。

持てる最後の力で欄干にたどりつき、欄干を乗り越えて下の川へ飛び込み、火の熱さから逃れようとしたのだろう。だが、最後の努力もそこで尽きたのだろう。橋の欄干に片足をかけ、頭を下にした黒焦げの死体が、橋から落ちそうな格好で欄干にひっかかっている。欄干につかまり、あるいは寄り掛った姿で悲しく首をたれて漆黒の骸となってしまった遺体も処々に見られる。

昨夜、避難した墨田公園から、火を背中に背負い、橋の上から川へ飛び込んだ大勢の人達を見たが、この欄干際の人たちは、川にも飛び込めなかった人達であろう。それにしても寒夜に川へ飛び込んだ人達は、どれだけの人が無事に逃げきれたのだろうか？

焼死体と化してしまった人達が、最後まで持ち運んだであろう荷物の残骸など、何一つも残っていない。一晩中吹き荒れた強風が、全てを焼き尽くし、灰すら残っていない。遺体の陰には、風に飛ばされなかったタイヤやサドルがなくなった自転車

やりやカーが、燃えない金属部分だけになって無数転がっている。焼けただれて赤茶けた大きな鉄の輪は、大八車の車輪の金輪だろう。大人の遺体の腹の下に潜るように頭を突っこんでいる遺体は、他人の陰に隠れて、わずかでも燃え盛る灼熱地獄から逃れようとしたのだろうか、そんな遺体の行為に、人間の弱さ悲しさを現した行為に誰が批判など出来よう。その遺体の傍に、がま口の金具らしい物と焼けて変色した五〇銭銀貨が数枚黒くなって落ちているが、それはその遺体が身に付けていた物だろうか？ 片足だけの黒い遺体のくるぶしに、小さな足袋の「こはぜ」が、黒くなりながらも微かに太陽の光に反射していた。

橋のほぼ中央に一台の消防車が、すっかり焼けただれて止まっていた。赤く塗られた車体の塗料はすべて剥げ、タイヤも焼失し、搭載されていた消防ホースも、座席のシートも焼けるものは全て燃え尽きた無惨な姿で立ち往生していたが、露出した座席のスプリングが、巨大な動物の腹わたのように不気味だ。運転席には、哀れにも漆黒の炭と変わりはた姿で、消防士がハンドルを握ったまま、そのハンドルに身体をふせて死んでいる。その遺体の頭に鉄帽だけが、遺体を守るようにチョコンと載っている。脇の座席には、車から降りようとしたのか、やや身体を横にねじって、天井を仰ぐように頭を上に向けた消防士が、大きく口を開けて死んでいる。消防車の後部付近には、数

体の消防士が真っ黒く丸焼けになって転がっているが、それらの遺体が消防士とわかるのは、その頭部に残されている鉄帽が生前の職掌を語っているためだ。

人間が焼かれる時は、どれ程多量の油（脂肪）が燃えるのだろうか。真っ黒な木炭の山のような遺体の下は、舗装のアスファルトが溶けて、黒く変色した凹みとなっている。どの凹みもそれだけの遺体が死の苦しみを訴えるように、息も絶えて最後に動かなくなった遺体の姿をそのまま橋の上に写している。広げた手、伸ばした足、曲げた首、もしその遺体がなくても（収容した後）、此処にどのような遺体があったと解るように、その形がそのままアスファルトの溶けた形が地上に残されているのだった。橋上に所狭しと転がっているそんな多くの遺体を見ても、私の感覚が麻痺してしまっただのか、恐怖心もそれ以外の何の感情も起こらなかったのが、今になってみれば不思議だが、それがその時の本当の私だった。

言問橋を渡り終わった浅草側の右にある陸軍の高射砲陣地には、昨夜の猛火を浴びた高射砲が数門、火焰を浴びて塗料も剥げて砲身も空に向けたまま醜い姿を晒している。昨日まで、その部隊の兵士が居住していた急造の木造バラックの兵舎は、すっかり焼け落ちて、その跡形さえ残さず、陣地内には一人の兵隊も見えない。

河岸の傍に、数体の兵士の遺体が、わずかな川波に打たれて

横たわっているが、どれも下半身はゲートルを巻き軍靴を履いた兵士の姿だが、上半身は橋上の遺体のように真っ黒く炭化し哀れな姿と化している。その兵士の遺体の間に挟まるように、モンペ履きの女性の水死体が上向きに浮くともなく沈むともなく漂っていたが、一匹の鷗かもが哀れにもその遺体の目を突っ突いている。

また、その高射砲陣地の門の脇に使うのか直径一メートルほどのセメント製の土管が二、三個置かれていた。その土管の中に四、五人の人が、重なるようにして頭を突っこんでいたが、足と尻が土管に入らず全員が黒くなって死んでいる。土管に潜って少しでも、妖火から逃れようとしたのだろう。

言問橋を渡りきった浅草の町には、焼け残った家など一軒もない。橋のたもとから上野まで、昨日まで見ることが出来なかった上野の森がハッキリと見える。わずかに視野を遮るものは空洞化したコンクリート造りのビルだけで、それが焼けて廃墟となった下町を吊る墓標のように空しく立っているだけだ。左手に見える浅草松屋のデパートが、まだ猛烈な黒煙を各階の窓から吹き上げて燃えている。

以上は、私が旧制の都立七中（現在の墨田川高校）の四年生だった昭和二〇年三月九日の夜半から十日にかけてのB29爆撃機約一三〇機の東京下町の夜間爆撃の体験の一部を書き記したもののだが、当夜の身元不明の遺体は、戦後数年、「男女年齢不明

の墓」「男五十位の墓」「女・山本の墓」と書かれた小さな木標を建てて墨田公園に仮埋葬されていたが、最後まで引き取り手がなかった数多くの遺体は、震災記念堂に移葬されて、そこに眠っている。

なお、警視庁の記録によれば、その夜の空襲の被害は次の通りである。

死 者 八三、七九三名

負 傷 者 四〇、九一八名  
（当夜の即死者のみ）

全焼家屋数

二六七、一七一戸

焼失面積 四二平方キロメートル

罹災者の数 百万人以上

死体収容に要した日数 二五日

（三好 徹著「興亡と夢」第五卷より）

B29が投下した爆弾と焼夷弾の種類と数

一〇〇キロ爆弾

四五キロ油脂焼夷弾

二・八キロ油脂焼夷弾

一・七キロエレクトロン焼夷弾

以上、合計二〇万発と推定され、一平方メートル当り、約三発が投下された。

（爆弾等の数字は、鈴木俊平著「風船爆弾」より）